

## 「三番三の舞の構造」(二)

中村美也

### 1) 序

「三番三」の「揉ノ段」は、演者の身体全体から発せられる足拍子とカケ声によって我々の目と耳に直接訴えかけてくる舞踊である。

能楽の「式三番」(通称「翁」)の中の「千歳の舞」,「翁の舞」,「三番三(揉ノ段, 鈴の段)の舞」は、各々特殊な足拍子を数多く含み、よくその研究対象となる。「揉ノ段」は「三番三」の前半の舞で、若者の勝達な舞とされ、後半部の静かな「鈴ノ段」とは性格を異にする。又、同じ若者の舞である「千歳の舞」と比べても異なる点を持つ。それは「カケ声」の存在である。

「揉ノ段」の成立に関しては、次のような報告がある。『…これまでその源流が考えられたことがない。確かに、「揉ノ段」の芸態は知られている呪師<sup>1)</sup>の芸能にも、方堅<sup>2)</sup>の芸態にも重なるものがないのだが、これは呪師と共に修正会修二会<sup>3)</sup>に参勤していた猿楽の芸に近似しているのではないかと思うのである…ここで注目したいのは、呪師、猿楽の順に芸が演ぜられた後、修正会の奉行の前で猿楽が慣習として演じた「扑躍(跳躍)」と「叫喚」である。…(それら)が「揉ノ段」の躍動的な舞の源流ではないかと思う。』<sup>4)</sup>又、これらの熟語は、日本芸能史第一巻<sup>5)</sup>に於いては「扑踊」「叫喚」とあり、各々、「手を打って踊ること」と「おめきさげぶこと」と訳されている。

### 2) 研究目的

そこで今回は「揉ノ段」の〈足拍子〉と〈カケ声〉に注目し、現行の上演の中に現れているそれらの様態やダイナミズムを詳しくみることによって囃子とも関連させながらそれらがどのような効果を作り上げるのかを探らうと思う。

### 3) 研究方法

1. 足拍子やカケ声への演技上の意識を知る。  
故茂山千作氏の芸談を中心に他の大蔵流狂言方へのインタビュー等を資料とする。
2. 足拍子とカケ声の各々の種類を知る。  
①取材したV.T.R.テープや録音テープを基に類別した足動作と発声の様態の相互関係、舞全体とのつながりをみる。  
②笛の唱歌の八割譜を参考に舞と囃子を組み合わせた全パートの総譜を作成し、囃子の拍子との関係を知る。  
③音響面の現象を科学的にデータに取り、音のダイナミズムを視覚的にみる。(音量測定器/サーマルアレイレコーダーWS-682G

NIHON KOHDEN)

### 4) 研究結果及び考察

#### 1. 足拍子の種類

『揉ノ段の拍子は、能はもちろん、他の狂言や小舞にも全く見られない特異なものですが、その違う第一は拍子を踏みながら前へ進んだり、後ろへ下がったりすることです。…次に変わったところは、三段目の抜き足とそのすぐ後の横拍子で、三段目は大小前から大臣柱へ半身の構えで左右左と三足ずつ抜き足で進み、横拍子は大臣柱から正面先へ顔は正面を向きながら踏み進むので、目先の変わったなかなか良い型だと思います。…次は鳥飛び(カラスとび)、これは拍子と申せないくらい変わったもので、大小前から目付け柱の方へ両足を揃えて三足ばいばいばいと飛びのです…』<sup>6)</sup>

前回でも報告した以上の4つの足拍子<sup>7)</sup>を更に詳しくみると、次のような性格の違いがみられる。

- (1) 明かに囃子の流れを意識して調子にのって細かく拍子を刻んでいるもの
- (2) 「踏む」と言うこと自体に重きを置いているとみられるもの

(以上の4つ以外にも腰を上下させ三歩大きく反転後退する、正面に向いて足を掛ける、つま先立ちで小走りに進む等興味深い足の動きがある。)

又、各足拍子に於ける足音の出し方も一様ではなく次のような次の様な踏み分けがある。

- ① 足の裏全体で床面を叩く
- ② ①に膝の大きい上下動が加わる
- ③ 踵で音を出す(演者により差がある)
- ④ ②, ③の動作で音をたてない

#### 2. カケ声の種類

『それから「揉ノ段」の掛声ですな、あれも他のものには全然ないことです。①いやあ、②はっ、③えい、④やっ、⑤いよう等の掛声を舞の間に掛けるのは、揉出しの「おおきえー」の気持ちと同じ喜びのあふれたもので、あの掛声によって「揉ノ段」はいっそう活気のあるものとなります。調子は十分張るのがよいので、何度も申しますが、「揉ノ段」にいじけは大禁物です。それから留めにも⑥いーやーっ、と言う声を掛けますが、これは普通の狂言でも脇狂言や大名狂言にままするものです。』<sup>8)</sup>

以上から発声の種類は①イヤアッ、②ハッ、③エイ、④ヤッ、⑤イヨウの5つがある。さらにこれらに準じるものと⑥イヤァァー、⑦イヨオーハッ、⑧エイッエイッエイッがあるようだ。

『掛声がなかったら三番三は舞えない。』<sup>9)</sup>と言う言葉からもわかるようにカケ声は動作の「舵取役」と言えよう。又、発声は呼吸のコントロールに関わる。つまり全体の律動の波と、内なる拍子とが呼応するように、全身に「気」を発し集中力

を高めて行くと考えられる。声の出しかたは演者により少しずつ異なり以下のような様々な発声の表情を持つ。

- (1) 拍子に調子よく乗るためのもの
- (2) 何かを追い払うように奇声を発するもの
- (3) 気合いを込めるようなもの

### 3. 足拍子,カケ声,袖動作,囃子との相互関係

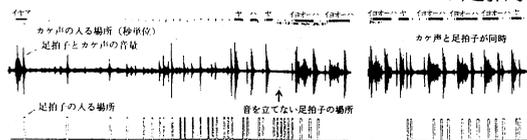
#### (1) 足拍子とカケ声の関係

・舞の格段の始めの「イヤアッ」の後には強く大きい足拍子が2つ入る。

・拍子に調子よくのる足拍子の時はカケ声はほとんど入らない。この時足音を出さずに踏む、拍子を抜くなどの技巧が入る—図①参照

・始めの段においては、カケ声と足拍子が別々に入るが、三段の抜き足拍子では、足の動きと同時に発せられる。—図②参照

図①カカリの足拍子とカケ声



図②三段・ヌキ足拍子

#### (2) カケ声と袖

・「イヨオーハッ」の後には必ず袖動作が伴う。袖の掛け払い、巻きつけ、巻きつけて肩にかつぐ、大きく広げ開くときなど。

#### (3) 袖と足拍子

・舞の格段の始めに袖を巻きつけ肩にかついだ後すぐに足拍子が2つ入る。

#### (4) 舞い手と囃子手の関係

##### ① 笛との関係

・笛の手(特色ある旋律型)の後すぐに舞の格段の足拍子が開始される。

・舞い手の「袖カケ」(大きく左, 右と掛ける)というのは、三番三の終わりをつげる重要な節目であるが、その時左袖を合図に笛は特別な手「袖カケの手」を奏す。

##### ② 小太鼓との関係

・特に舞の変化に合わせた手(特色ある拍子型)は見つからなかったが、舞の脈動感を一定に保つ基盤となる役目を持つと思われる。

##### ③ 太鼓との関係

・「揉み出し」が終わり、太鼓の打つ四つの打音を聞いた後全員が「揉ノ段」に入る。

図③ 総譜の一部(『揉1段』初段)

拍子	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	8
舞(舞手)	ク	ソ	イ	チ	ノ	ハ	ク	ソ	イ	チ	ノ	ハ	ク	ソ	イ	チ	ノ	ハ	ク	ソ	イ	チ	ノ	ハ
大 鼓																								
小 鼓																								
太 鼓																								
笛																								
笙																								
尺 八																								
三 味 線																								
人 間 鼓																								

・舞の格段の足拍子に合わせて、特徴的な手を打つ。(但し、流派により多少異なる。)

#### ④ 囃し手の舞い手カケ声

・舞い手のカケ声「イヨオーハッ」の「ハッ」は全体を通して、笛の唱歌の4拍目で大小の鼓と一致する。つまり、全員のかけ声が揃う箇所がある。—図③参照

上演の中で展開される演者間の相互関係は、主従の関係ではなく、各々見せ場を持ち、独立の立場を取りつつも拍子を共有点に意気を合わせ、互いに集中と緊張を高め合っていく。拍子の脈動に合わせて舞の後半部から盛り上がり足拍子とカケ声の連続複合により舞い手の動悸は高鳴り、囃し手のカケ声はこの興奮を一層あおりたてる。演者相互のダイナミズムは大きくうねり、「鳥飛び」の大きなカケ声と跳躍で頂点に達する。やがて全体は静まり、全員同時に打ち留め、静寂が訪れる。

この様に「三番三」の「揉ノ段」に於いては、曲が本来有する拍子感に加えて、足拍子とカケ声の存在が、躍動的なダイナミズムを創り出す外部的誘発要因として大きく作用していると思われる。

#### 5) 今後の課題

ではこの「鳥飛び」を頂点とする「揉ノ段」のダイナミズムの構造がいったい何のためにあるのか。次段「鈴ノ段」に進む前にこの「揉ノ段」の意味の探求が課題となろう。

#### [註]

1. 平安鎌倉時代にかけて存在した猿楽者の一類。仏教上法会に於いては法呪師とも称せられ、悪魔払い的な行法や鎮壇結果等の密教的行法を勤仕する僧である。〈略〉/演劇百科大事典 平凡社 S37年
2. 神社の社殿造営に於ける上遷宮(御神体の新社殿への遷座)に際して演ぜられた鎮壇結果の呪術的な芸能/天野文雄「中世文学」30号 1985年
3. 毎年正月、或は二月に各寺院で修する法会。御本尊に罪障の消滅、天下泰平等を祈る。
4. 天野文雄「中世文学」30号 1985年
5. 芸能史研究会編 法政大学出版局 1981年
6. 8. 茂山千作「日本の芸談 3」九芸出版 S. 53年
7. 「舞踊学」舞踊学会 1991年 No.14-1
9. 茂山千之丞氏へのインタビューより 1990年7月
10. 小泉文夫「日本伝統音楽の研究 2 リズム」音楽之友社 1984年 p.66
11. 豊島修「美作の護法まつりと修験」『山岳宗教史研究叢書 15』名著出版 S. 56年
12. 図①②/稽古過程取材テープより(茂山千之丞氏 1990年6月)
13. 図③/VTR「翁」公演(国立能楽堂 S. 58年9月)より採譜